

嬰殺旗本
探偵実話 断ち切られたものたちの闇

浜 田 雄 介

一

明治二十六年十月一日から翌年一月二十一日まで『都新聞』に掲載された「中川吉之助」について考察する。連載時のシリーズ名は「探偵叢話」でタイトルの角書きは「極悪探偵」だが、二十七年一月二十六日に刊行された際の角書きは「探偵実話」となる。本稿では慣例に従い、ジャンルの名称については「探偵実話」を用いる。

『都新聞』は明治二十年代前半、黒岩涙香の翻案探偵小説を呼び物としていたが、二十五年に涙香が退社するとともに部数を激減させた。その窮地を脱すべく試みられたものの一つが探偵叢話で、もと警視庁刑事であった高谷為之が現実の事件記録をまとめた六百字程度の読み切り探偵事

実譚であったが、明治二十六年四月十四日に始まった「清水定吉」は全六十九回の連載となり、大評判を呼ぶ。新聞連載の後で単行本となるまとまった作品という意味では、この「清水定吉」を探偵実話の第一作としてもよいだろう。

この「清水定吉」及び第二作「三週間の大探偵」については、別に論じたことがあり、そこで「探偵実話」の多くに共通する表現上の特徴として次のような点に言及した¹⁾。

(1) 小説形式に対して強い反発があること。しばしば「編者」が介入して「これは実話であって小説ではない」と言及する。

(2) 虚構と現実の連続する都市の表現。実話はそれだけで独立したものではなく、現実の事件や登場人物と重なって享受される。

(3) 繰り返される変装変名。発表上の制約により探偵や関係者は仮名で記されるが、実名で記される犯人たちも、頻繁に変装変名する。

(4) 探偵と犯人の親近性と遊戯性。巡査が犯罪に手を染める一方、犯人も警察組織に入って情報を集める。しばしばゲームのような性格を帯びる。

これらの点に関してはおおむね「中川吉之助」にも受け継がれるのだが、もう一つのジャンルの特徴として、常に前作とは異なる趣向や問題性を追究してゆくということがある。目先を変えて読者を飽きさせない大衆読物の当然の戦略と言えども正しいのだが、しかし変えられるのは必ずしも目先の意匠だけではない。「清水定吉」でスーパーヒーローめいたモダンなピストル強盗を描いたかと思えば次の「三週間の大探偵」では犯罪集団対警察組織という群像のドラマを描き、続く本作「中川吉之助」では江戸と明治、親子二代にわたる極悪犯人を描く。更に言えば第四作「国事探偵」は、国事事件か否かは別としても、ともあれ革命の問題を扱うに到るのである。

では本作の場合、記した通り江戸と明治、親子二代という関係性が描かれるのだが、なぜそれが描かれるのか。吉之助の犯罪を意味づけるのに、なぜそのような関係性が必

要だったのか。

二

事件の発覚に始まり、捜査の物語と並行あるいは後続して推理による犯行の再現がなされてゆくオーソドックスな探偵小説に対して、探偵実話では事件の発覚や捕縛の瞬間などのハイライトシーンが書かれた後で、犯人の生い立ちがたどられるというスタイルが多い。生い立ちの記述自体は時間軸に沿った一代記風の流れになるのだが、冒頭のシーンは、やがてそこに立ち返るといふ期待を抱かせることで、重要なプロット上の意味を持つ。

「清水定吉」の場合、全六十九回のうち、生い立ちの記述が始まるのは第十二回であったが、「中川吉之助」の場合、第一回の後半には既に生い立ちの記述が始まる。一代記的なドラマツルギーがより強度に働いていると言えるが、それにしても第一回前半には次のような事項が記述される²。

(a) 明治十九年九月十九日、金貸業高木お浅が、姪お才の死骸を発見し高輪署に訴え出た。

(b) 一人の巡査が、犯人はかつて探偵の下働きをしていた中川吉之助ではないかと言いだす。

(c) 刑事巡査が同行を求めたところ、吉之助は隙を見て逃亡。ただちに非常線が張られる。

(d) 吉之助は台町の伊集院兼常の邸内に忍び込み、茶室の床下に潜んで逮捕を免れる。

(e) 慶應元年に十四歳で兄を殺して以来十人を殺害した吉之助は、二十年に捕縛され、二十二年死刑となった。

(f) 事件を探偵されつつ、吉之助自ら警察署に勤めていた所などに探偵談の面白みがある。

(g) 父の時代の事は大筋にとどめるが、情報を寄せて戴けば取り入れてゆきたい。

(a) (d) は事件発覚から逮捕に到る場面の一部で、(e) (g) はそれを受けた吉之助のプロフィールと作品執筆の方針である。注目すべきは、(a) (d) の記述のうち

で、(d) が約半分近くの分量を占める点と、(e) における犯罪記述がおそらく意図的に一つの要素に触れていない点である。後者については後に述べる。

(d) の伊集院兼常の邸宅は、その後伊藤博文に購入されたこと、事件当夜は井上馨、大倉喜八郎らの夫人たちが「其頃流行の貴婦人遊び」に熱中していたことが記される。この場面は、物語後半第六十四回に、ほぼ同じ表現が使われ、次のような説明が続く³⁾。

近頃は絶て斯る話も聞ざれども明治十九年と云は鹿鳴館などに毎夜の如く舞踏の流行したる頃にて束髪洋装の貴婦人令嬢なるものが斯る遊に余念なかりしことを思はゞ此記事の如何にも事実を其儘写し出すなることを証するに足ん中川吉之助は元々探偵を職業としたりる男なれば上流社会の斯る内幕は十分に一から十まで知ぬき居たるなり

「上流社会の斯る内幕」には、右の夫人たちの交遊のみではなく、「彼所なら巡査が番をして居て巡査を入れ無いと云ふ様な妙な都合があるだらう」と吉之助が推測するような「都合」も含まれよう。それゆえに、吉之助は緊急の避難所として同邸の離れ茶室の床下を選ぶのである。

雨戸も閉めず、煌々たる灯のもとで夜明けがたまで続けられる夫人たちの遊興と、彼女たちの食べ残しを手拭いに包んで盗み、それを食しつつ暗い床下に潜む吉之助という構図は、カリカチュアのように鮮明な貴賤、貧富の対立図式である。作品発表の明治二十六年は第二次伊藤内閣の時代、井上は内務大臣を務めている。鹿鳴館外交は既に過去のものとなっていたが、明治の人間に「上流社会」の存在

を意識させた社交ぶりは記憶に新しく、また伊藤の自宅である伊皿子郎は作品連載時にも大臣や元勳の会合に使われ、しばしば報道もされていた。そして一方の中川吉之助の階級とも云うべき「旧旗本」も、やはりしばしば新聞紙上で取りざたされていた。試みに読売新聞のデータベース「ヨミダス歴史館」で「中川吉之助」連載開始時までの「旗本」を検索すると五十五件がヒットする。その過半は、生活苦から自殺したり、強盗をして逮捕されたりといった惨状である。美談も紹介されるが、それも零落ゆえの美談である。

伊集院に対する本文の記述は「高等幫間など、綽名さる、上流交際社会の愛嬌もの」などと必ずしも好意的ではなく、すると右の図式からは、義賊とまではいかないにせよ、上流階級への破壊的な衝動を託すべき爽快な悪漢としての吉之助像が、あるいは予想されるかもしれない。「清水定吉」「三週間の大探偵」には確かにそのような一面があった。第一回後半に紹介される吉之助の父千巻は「剣槍砲の三術を指南し常に多くの門下を有し」、「容貌魁偉」ながら「大兵肥満の立派な武士」で、「強力」かつ「風流遊芸の心得」もあつた、とされる。その御曹司千摩太郎が後の吉之助であるとすれば、悲劇の悪漢たる要素は揃っていると言えないくもない。

だがこれ以後に記される千巻および千摩太郎の行動が、はたしてどれだけの読み手に共感を覚えさせたであろう。

千巻は不良仲間と花見の最中に人妻お逸に狼藉を加え、お逸をその亭主徳兵衛から奪い取る。千摩太郎を生んだお逸のもとに、やがて徳兵衛との間の息子巳之助が訪れるが、二人の会話を隠れ聞いた千摩太郎は巳之助を切り捨て、事情を知った千巻は徳兵衛を殺す。必ずしもお逸や巳之助に同情的な書きぶりではないものの、印象づけられるのは旗本父子の横暴である。

遊興する頭官の夫人と潜伏する吉之助という先の構図は、そこに新旧両勢力を重ねることは可能であろうが、両者いずれも一般の読者にとって自己を投影できる対象とは言い難い。読者にあるのは、一方の側に立って他方を攻撃する楽しみではなく、寓意的な構図に対して観客を決め込む楽しみであるように、ひとまず、思われる。

三

だが問題はもう少し複雑である。旗本の不良仲間と親しみ、幕末の動乱を背景に軍資金調達の名目で押し込み強盗を繰り返しながらも、父千巻には旗本としての倫理性があり、千摩太郎にはそれが無い。「お鉄牡丹餅」の事件では、

武家の作法をとがめる老婆に身を恥じる父に対して、子は躊躇なく老婆を斬り殺す。また瓦解に際して最後まで徳川家への忠節を志す父に対して、子は官軍への鞍替えを進める。それでは子はまったくの合理主義者かと言えば、明治二年に府兵局断獄の手に捕縛され三年間の入獄（父は死刑）となった千摩太郎は、牢名主安五郎の寵愛を受けて「おツユ（側小姓）」となり、出獄の際には涙を流して別れを惜しむ。「吉之助」の名も、安五郎の旧名を貰って以後名乗るようになったものである。筆者⁴自身「斯る場合の情は編者などの想像外なり」と記すごとく、なかなか複雑である。

出獄後の吉之助は、獄中で培った人脈や犯罪手法などを利用しつつ諸悪を重ねてゆくのだが、横田亮之助の事件——内藤新宿の地回り亮之助と知り合い、騙して金を巻き上げた上でその不始末を父親に密告。父は亮之助を殺して自害——が記された直後に、中川家の公用人であった結城新左衛門が現れる。吉之助の前に、ではない。現に探偵実話を書いている筆者の前に現れるのである。

先にまとめた冒頭（㉔）の部分に記された通り、作品には何人かの関係者から寄せられた目撃談が挟まれているのだが、結城の証言は少し複雑な扱いがされる。すなわち、第

二十六回まで発表された後、結城の証言五回分が挿入されるのだが、この五回は本来第十九回（千巻の死、結城が菩提を弔う）の後に続く筈だったとして、第二十回から第二十四回の番号が付せられる。つまり、連載時の回数表示は
ア（二）～（二十六）
イ（二十）～（二十四）
ウ（三十二）～（九十）
となっているが、イはアの途中、第十九回の次に組み込まれるべきものであり、アで既発表の第二十回～第二十六回は、第二十五回～第三十一回だったことにしたい、ということである。

第十九回は、千巻の死と結城がその菩提を弔うという話なので、その次に結城の証言が置かれるという順序は一応の理屈である。だが、それならば単行本にする際には順番をそのように入れ替え、回数表示も直せばよさそうなのだが、そうはなっていない。連載時と同じく（二十）～（二十四）の数字は二回使われ、（二十七）～（三十一）は存在しない。連載完結直後の単行本発行という時間的制約はあるが、修正を入れている探偵実話作品がないわけではなく、これは意図的なものとは言えないまでも、特に修正を要することではないという判断が働いた結果と言えるだ

ろう。

順序の問題だけではない。結城の証言は、それまでの記述をかなりの程度にひっくり返す内容なのである。結城と中川家との関係や中川家の内情、千巻の人となりなど、多くの点に訂正が入るのだが、特記すべきは少年期における吉之助の二つの殺人が、いずれもあやふやなものになってしまうのである。結城によれば、吉之助の母親は堀内村百姓郷左衛門の娘で居酒屋奉公からその妾になり、さらに中川家の女中になったお菊である。第二十一回には「編者曰く」としてこう付け加えられる。

結城が語る如くばお逸は下駄屋徳兵衛が妻にあらざること明かなり然れば千巻の徳兵衛殺しも千摩太郎の巳之助殺しも誤まりの様になり来れども徳兵衛巳之助が事は都新聞社の植字課文選方某なる者あり其母は徳兵衛が妹と手習朋輩なりしよし編者が本篇を掲げ出すに至り某に此事を語りたれば下駄屋徳兵衛及びその一子巳之助なる者居りしことは確かなる事実たるや疑うべからず殊に巳之助の異母の姉お鶴は中川吉之助が処刑さる、時裁判所書記たりし某の妻にして今も現に芝兼房町辺に住し居れば其殺さるゝに至る原因に何かの間

違ひはありとするも殺されたる事実 は明かなり

もう一方の、「お鉄牡丹餅」の事件では、老婆を斬ったのは吉之助らではなく堀内五郎左衛門の一派ではなかったか、と結城は言う。堀内もまた、英雄豪傑を気取り追剥強盗も行っていたが、焙烙調練の際に千巻に敗れて死んだという（第二十二回）。ところがこれにも、第二十三回の末尾に次の付記がされる。

前号堀内五郎左衛門は坪内五郎左衛門ならん。同人は上り屋に入牢中死去せり焙烙調練にて落馬し死せるは内藤右馬之助ならんと御教示状三通ほど来れり

この種の矛盾は探偵実話にしばしば出現する。興味深いのは、証言に食い違いが生じた時に、筆者が必ずしも真相を探ろうとしないことである。いずれが真相かによって、単行本の際には記述を訂正することもできようし、逆に信用できない証言や投書を削除して紹介しないこともできるだろう。だが、そのような辻褄合わせはなされない。本文の訂正もなく、挿入された証言もそのままの形で残される。単純な手抜きの可能性も高いのだが、あるいはむしろそう

だからこそ、そこに筆者のこだわりが潜むとも考えられる。作品として完成させる事への、奇妙な反発である。調べればわかるだろうがきりがいいことなので、という論理が、しばしば記される。わざわざそのように、書かれるのである。見ようによつては一つの真相に確定するのを避けているかのような印象もないではない。

四

そもそも、吉之助の少年期の殺人は、なんのために書かれたのか。無論、彼の極悪非道ぶりの萌芽を描くためである。しかし彼の極悪非道ぶりとは、どういうものなのか。やはり、兄殺しや老婆殺し同様の、あやふやなものなのではないか。

しかし吉之助は実在の人間であり、現実処刑されているのである。真相の奥深くは窺えないにせよ、当時の人々にとって、何が既知の情報だったのか。

作中第七十二回に、事件が『読売新聞』で報じられたことが記されている。同紙を追いかけると、まず明治十九年三月二十日に「人殺し」と題して、高木お浅のもとに強盗が入り二十円を奪いおせん的首を切つて逃げたと報じられる。翌二十一日には「人殺犯」として、強盗は三田四国町

の者で拘引の途中、逃亡したと報じられる。さらに二十六日に「人殺犯捕縛」として中川吉之助が八丁堀に潜伏していたところを警視第二局の手で捕縛されたと報じられる。そうして一件落着いたかと思われた四月九日、新たな真相が明らかになる。長すぎる引用になるが、記事全文を紹介する。

無残な子殺し 先月十八日の夜芝田町五丁目の高木おあさ方へ忍び入り金二十円を奪ひ取りし上同人の姪田中おせん（二十七年）の首打落して逃げ去りし悪賊中川吉之助（三十五年）は未だ其他に子殺の犯罪がありて昨今其筋にて取調中の由なるが今其大略を聞くに同人は旧幕の旗本にて千五百石を領したる中川千万機と云ふ者の長男にて父千万機は武士の家に生れながら廉恥を重んずる心なく強盗押込などを度々働きたる為め終に捕縛の上斬罪に処せられたる悪党なれば其倅なる吉之助も父の悪業を受継ぎ非道にも是まで貰児をして殺害せし事数度ありて先づ最初に昨明治十八年中麻布田島町に住居せしころ芝区横新町石井おりんの娘おみねの男子十八年四月生なるを里子に取り台所の下流へ砂利埋にしたが手始にて次は麻布本村町に住居中横浜

寿町の人力車夫谷田部安太郎の倅にて四ヶ月に成るを貰ひ受け間も無く手拭にて締殺し三度目は同年七月荏原郡白金村の植木屋鈴木長久の三女おかめ（三年）と云ふを金五円と衣服料一円五十銭を添へて貰ひ受け其翌日自宅の前にある杏の樹の下を三尺ほど堀て其中へ埋め殺し四度目は同区宮村町へ転居中同年九月八日八丁堀長沢町滝口およしの娘おはな（十二年）を貰ひ受け二三日経し上自宅の台所の揚板を外し其下の糠味噌桶の下を堀りて埋め殺し五度目は尾張町二丁目の廻り髪結内田仙太郎の二男仙吉（二年）を月二円五十銭にて里に取り薬缶の熱湯を浴たる体に取り拵へて親許へ示談を遂げたる上死骸を返せしが其後又も木挽町二丁目団十郎齒磨屋の娘にて三ヶ月になるを此一月金十五円付て貰ひ受けまた赤坂新町四丁目今枝栄蔵の孫おゑい（二年）を同く此二月七日金十円付て貰ひ受しが此二人は未だ吉之助が殺さうとせぬうちに同人は芝田町にて強盗と人殺しをして捕縛になりし為め無事なりしが然らざれば此二人も前の五人と同じ運命に陥りし成らんとする事なるが右につき去る五日と六日の兩日警視庁よりは大迫警部と巡査鈴木善吉、宇田川万五郎、橋本広重の諸氏が出張して殺されし小児の埋て在る箇

所を臨検して残らず堀出されたと云

この記事があるからと言って、中川吉之助の名が世間にはそれほど知られていたかはわからないが、事件の発覚は作品連載の七年前であり、『都新聞』にとつては言わば地元の記事でもある。『都新聞』紙上の予告（明治二十六年九月二十九日、三十日）には「千巻が事は四十以上の人は皆な御存じ」としており、実際、連載中に証言が集まつてくる様子を見れば、この事件を知つていた読者はそれほど少数ではないかもしれない。その場合にはあるいは、子殺しの事件がいつ語られるか、というサスペンスが生まれた可能性もあるが、ともあれ作品冒頭をはじめ予告にも子殺しの文字は一切書かれない。探偵の活躍を主眼とする探偵実話であり、扇情的な興味で読まれることを恐れたとも思われるが、しかし吉之助事件の衝撃の中心は、やはり貰ひ子殺しの犯罪であろう。

右の記事が探偵実話作品以上に衝撃的な印象を与えるのは、因果関係や心理的背景などの説明がなく、恐るべき事実がただ事実として記されることによる。探偵実話がめざしたことの一つは、文学的修辭を排してこのような素材の持つ力を生かすことだったはずだが、それにしてもやは

り、小説風の加工は施されている。まず、殺害の様態を詳しく記すのは、二つの事件に絞られている。一つは吉之助をして貰い子殺しに足を踏み出させた事件で、同情による貰い子が妻お糸の嫉妬を招き、殺害を余儀なくされるという物語が描かれる。いま一つは廻り髪結善太郎の息子の事件で、殺害の結果が実父の疑惑を招き吉之助逮捕に繋がるという展開に結びつけられている。

そのような関連づけによって、筆者は子殺しに文脈を与えようとしているのである。作品前半に吉之助の少年期の犯罪を描いているのも、おそらく同じ発想であろう。已之助殺しは、母親お逸を独占するために、自分以外の子どもを殺す行為である。お鉄殺しは、父の命により殺人機械となった子が、その父のためらいを断ち切った事件である。かくのごとく血縁の情や人間性の絆を一切顧慮しない機械として育てられた、あるいは自ら育った吉之助が、維新後に捕縛されて父を失い、自らも入牢してそれまでの生活を断ち切られるのは、象徴的とも言えよう。

明治二年の捕縛前に、強盗仲間と素人芝居をうち、女形を演じていたのは何かしら彼のセクシヤリティを物語るものがあるのか。父の死後、牢名主安五郎の寵愛を受けるのは、その抛りどころの無さを埋めるものでもあったか。釈

放後に起こした横田亮之助の事件が、父子心中のような形に終わる事にはどんな意味があるのか。これら諸々の文脈作りはもちろん解釈行為の一つである。ただし筆者はその解釈を、筆者の特権によって權威付けはしない。食い違ふ証言については先に触れたが、真相を一つに確定するのではなく、相対性と不可解を覚悟した上で、可能性によって事件を捉えてゆこうとするのが、探偵実話のスタイル即ち世界観なのである。

吉之助の一件に限らず、貰い子殺しは当時しばしば新聞紙上に報道されていた。吉之助が最初に貰い子をするのも、女兒を邪魔魔にして里子に出そうとする母親たちの会話を聞き「児がほしきにはあらずして持参金のみほしき次第にてある時は残酷なる取扱ひして殺しもし兼ねは随分新聞などにも記されてその例あり」と考えたためである（第四十八回）。また善太郎が吉之助を疑いを持つのは、吉之助宅の近所の女たちが重なる貰い子を噂し、「大きな声ぢや云はれぬけれどもア、それ新聞なんか……ヒヨツとすると知れないもんだよ」という言葉を聞きとがめてのことである（第五十三回）。

明治十三年に制定された刑法では、「墮胎ノ罪」が明文化された。墮胎を行った女性は一月上六月以下の重禁固、

墮胎をさせた者もこれに同じく、墮胎によって女性を死なせた者は一年以上三年以下の重禁固である。もともと母体のためには墮胎よりも生んだ後の間引きの方が負担は少ないという判断もあったが、こちらは殺人罪の適用になる。

望まれることなく生まれてきた子供たちの一つの道が里子であった。せめてもの養育費を添えて里子に出す親に子への愛情がなかったとは言えないが、行き場のない子供たちを、親に代わって別の世界に送るのが吉之助だったとすれば、その罪は吉之助だけの罪ではあるまい。

むろん、墮胎も子殺しも貰い子殺しも、それらに対する罰則規定も、この時期に始まったことではないし、法律が出来ても単純に規定通りに運用されたわけではない。ただ国をあげての近代化が進む中で刑法の制定や新聞の報道は、曖昧な闇の中に存在していたいとなみをあらためて意識に昇らせる契機とはなったであろう。新聞報道を思い起こして子殺しを防ごうとした吉之助が、かえって貰い子殺しの闇に落ちて行くのは、明治十六年の暮れ、十七年の正月である。

最初の子供を殺した吉之助は、自宅に死骸を埋める（第四十九回）。

ドウせ一人殺すも二人殺すも同じだお釜の子も折を見て殺して仕舞はふ其方が口説の種にもならず詰らぬことからヒヨツと悪事のバレる氣遣へも少なからうと云ふもんだ」と心は愈々鬼となりお春の死骸を其まゝ、ネンネコ半纏にくるみ素知らぬ顔にて持返り其夜の内に自宅の庭の梅の木の下を深く掘り埋め其翌日同じく宮下町七番地に転居し此七番地にてお釜の生みたる男の児を殺し裏手なる小陰の笹藪の下に深く掘り埋め今度

は麻布本村町に転居したり

犯罪の發覺を恐れるならば、転居は奇妙とも言えるが、前述第五十三回の噂話は疑惑の眼差しが吉之助らを包囲していた事を示しているよう。放浪する吉之助夫婦はそれぞれの家に、子供たちの死体を埋めてゆく。そのさすらいの先に、冒頭の伊集院邸の構図が置かれているならば、床下に潜む吉之助の姿は、押しつぶされた子供たちの姿と奇妙に重なるだろう。

五

貰い子殺人は、社会のありようが大きく変わった今日に

おいては遠い世界の犯罪という印象であろうが、それゆえにかえって民俗の古層に通じるかのような衝撃性も持つだろう。しかし筆者による本作の主眼は、第二節初めの(f)に記した吉之助と警察組織あるいは各巡査との駆け引きにあり、作中でもしばしば言及して方向付けがされている。ことに彼の二回の逮捕が一度目は徳川の岡つ引きにより、二度目は近代警察の巡査達によって行われることは確かに興味深い。おそらくはその方向付けのために、子殺しについては実際の記述においても焦点化を避け、予告や冒頭にも記さなかったと思われる。

とはいえ、警察組織に入り込んで情報を手に入れたり攪乱したりという駆け引きは、「清水定吉」や「三週間の大探偵」でも描かれていた。第一節に記した通り、探偵実話の枢要なドラマツルギーの一つである。その意味では必ずしも珍しい特徴ではないのだが、本作に即して少し考察を加えておきたい。

前節最後に引用した吉之助の心情描写には「ドウせ一人殺すも二人殺すも同じ」とあった。ここにあるのは、倫理的な堤防が決壊したということであり、この先犯罪を止めるのは物理的拘束すなわち逮捕しかないということである。多くの犯罪者が陥って行く(と、しばしば描かれる)理屈

で、ここから逮捕と逃亡をめぐるある種のゲームが始まる。本稿第二節に記した(a)～(d)の展開が時間軸に沿った本編で再び記された後、吉之助は偽名で新聞記者の家に潜む。警察の動きをさぐるとする吉之助は、事件をめぐる会話を記者と交わす(第七十二回)。「読売新聞を見ましたら芝の田町の金貸殺しの新聞が出て居ましたがひどいことをする奴があつたもんですなア」と問い、「何でも元と高輪警察署の探偵で中川吉之助とか云ふ恐ろしい強欲な奴ださうでしてね」と記者に答えさせるといふ具合である。

この種の自己言及は、相手の持つ情報の限界を知るといふ合理的目的を持つものだが、そもそもなぜそれを知りたいかと言えば保身のためであり、その底には自らの生存の維持に対する不安(と、それとは裏腹な奇妙な快楽)がある。現にこのすぐ後、吉之助はお糸の夢を見て、これが世に言う神経かと、思い悩むのである。気楽な口調ながら右の会話には、ポルフィーリイを前にしたラスコーリニコフのようなスリルもただよっている。この時吉之助の意識を占めているのは金貸しの老婆の姪殺しではない。夢に現れたお糸が語るのは、善太郎殺しの一件である。

貰い子殺しという犯罪は、犯行の容易さとする種の需要を背景に、しばしば大量殺人に結びつく。需要というのは

甚だ不謹慎な言葉なのだが、個々の意志とは別に、それぞれの時代の共同体に何かしらの力が潜在した可能性は否定できまい。その一方でしかし、それを担う人間の悪は、人間社会の許すものではない。前節最後の引用で筆者はそれを「心は愈々鬼になり」と表現しているのだが、その、鬼になってしまったことと、スリリングな逮捕逃亡劇のさなかに犯人が漏らす自己露出とは、おそらく無関係なものではない。

作品は、細かく分析するような口ぶりではその問題に関わらないのだが、やがて書かれる「山田実玄」なども考え合わせると、そのような心の闇に筆者の関心が向かっていた可能性は否定できないと思われる。

【註】

1 「監獄探偵実話近代警察の威信のかけに」『ミステリーが生まれる』二〇〇八年、風間書房。「清水定吉」については「探偵実話ピストル強盗を捕縛せよ！」『明治・大正・昭和の大衆文化』二〇〇八年、彩流社。

2 以下、吉之助の最初の殺人が十三歳であったり十四歳であったり、処刑が明治二十一年であったり二十二年であったり、細かな月日を含め記述の食い違いが多数存在するが、本稿では統一しなかった。

3 以下、作品の引用は柏書房による復刻版の『都新聞』を用い、漢字の旧字体や変体仮名は今日通行のものに改め、ルビを適宜省いた。

4 探偵実話は創作ではないとする高谷為之は、作中でしばしば「編者」と自称するが、ややまぎらわしい面があるので本稿では「筆者」という言葉を用いる。

(成蹊大学)